

論文

労働者のために闘い、ナチスに殺害された
女性闘士ケーテ・ライヒター

伊藤 富雄*

要旨

オーストリアの女性労働者のために闘い続けた女性闘士ケーテ・ライヒターは1895年8月、オーストリアのウィーンに生まれている。裕福なユダヤ人の家庭に育ったケーテは貴族や上流階級の子弟の通うリセウムを出た後、1914年10月、ウィーン大学に入学する。大学では後に社会主義化委員会で共に活動することになるC.グリェンベルク教授の講義を熱心に聴講し、史的唯物論やマルクスの著作にも関心を抱くようになる。

1918年11月以降、ケーテは「新しい左翼」というグループに所属し、労働者運動の統一を図ろうとする。

1921年、ケーテは同じく社会主義者のオットーと結婚。その後、社会主義化委員会やウィーン労働者評議会などで働く。

1930年5月、ケーテは『オーストリアに於ける女性労働のハンドブック』を作成、さらに1937年、「革命的社会主義者」の情報誌『情報・ニュース業務』の出版も引き受ける。

1938年3月、ドイツ国防軍、秘密国家警察はオーストリア国境を越え、数万人のオーストリアの労働者たちを逮捕する。ケーテの夫は何とかスイスへ逃れたが、ケーテは逮捕される。すぐさま裁判にかけられ、禁固四カ月の判決を受ける。そして1940年1月、ケーテはラーフェンスブリュック強制収容所へ送られ、1942年3月、殺害される。46歳だった。

1991年、ケーテの功績を称え、「ケーテ・ライヒター賞」（女性労働者および労働運動の女性史のためのオーストリア国家賞）が創設され、女性労働者のために尽くした女性活動家たちが表彰されている。また1995年にはケーテの生誕100年を記念した切手も発売されている。

キーワード

オーストリアの社会主義運動、社会主義化委員会、女性労働者、「革命的社会主義者」、ラーフェンスブリュック強制収容所、「ケーテ・ライヒター賞」

* 立命館大学経済学部 特任教授

目 次

| |
|-------------------|
| はじめに |
| 子供時代と青春時代 |
| 政治活動 |
| 逮捕まで |
| ラーフェンスブリュック強制収容所へ |
| おわりに |

は じ め に

生涯にわたって労働者のために、殊に女性労働者のために闘い続けた女性闘士ケーテ・ライヒター（以下ケーテとのみ記す）は 1942 年 3 月 17 日、約 1,500 名のユダヤ人女性と共にそれまで収容されていたラーフェンスブリュック強制収容所からの移送の際に、ドイツのマグデブルク近郊で、ナチスの親衛隊によって殺害された。46 歳だった¹⁾。それはナチスによる絶滅収容所アウシュヴィッツなどでの「ユダヤ人大量虐殺」という、悲劇の序奏だった。

ケーテは生涯のほぼ全てを社会主義労働者運動のために捧げ、最後の 4 年間は秘密国家警察による拘禁、そして強制収容所で過ごしている。

ケーテの夫で、同じく労働者のために闘ったオットー・ライヒター（以下オットーとのみ記す）は、ケーテについてこう述べている：

「もしかすると彼女は 19 世紀末および 20 世紀初頭のオーストリアの文化とヒューマンイズムの全ての良き要素を自らの教養と個性の中で実現した最後の社会民主党員だったかもしれない。」²⁾

また彼女の友人たちは、ケーテが両大戦間のオーストリアの労働者運動に於ける最も興味深く、かつ才能ある女性の一人だった、との意見で一致している。

本稿ではオーストリアに於ける反ナチス抵抗運動の中でも極めて異例な、女性闘士ケーテの生涯と活動を通じ、オーストリアの社会主義労働者運動に於ける彼女の果たした役割について考察するものである。

子供時代と青春時代

ケーテは 1895 年 8 月 20 日にオーストリアのウィーンに生まれている。両親は裕福な家庭

1) Herbert Steiner: *Käthe Leichter Leben und Werk*, Wien, 1970, S.13.

ケーテ・ライヒターに関する研究書、論文の数は少なく、筆者がウィーンの「抵抗運動資料館」で得た若干の資料も参考に何とかこの拙稿は完成した。しかし本稿は上記の研究書に負うところが大きいことを付記しておく。

2) Otto Leichter: *Käthe Leichter*, in: *Werk und Widerhall*, Wien, 1964, S.234ff.

出身のユダヤ人だったが、リベラルなウィーン市民階級に属し、ユダヤ人の慣習はせいぜい祖父たちから伝えられただけで、クリスマスもキリスト教で祝ったという。父親は弁護士で、家には趣味の良い家具が置かれ、世界文学全集も含めた、多くの蔵書もあり、ケーテは幼い頃から読書を愛し、文学や世界史に強い関心を抱くようになった。ケーテはそうした父親と心情的にも精神的にも強く結びついていたという。

ケーテは子供の頃から極端に感受性が強く、7歳の時に父親から芝居に連れていってもらった際に、毒を飲みそうになった主人公に向かって「飲んじゃ駄目！」と大声で叫び続けたため、慌てて父親から外へ連れ出されたこともあったという³⁾。

ケーテには外面的に非常に良く似た双子のような姉ヴァーリーがいたが、母親はケーテよりも美人で、活発で人懐っこかった姉の方をもっぱら可愛がり、そのためにケーテは大いに悩んでいる。その姉ヴァーリーは後にアメリカに渡り、音楽家、教育者として成功を収めている。

ケーテは子供時代から社会意識に目覚め、彼女の家庭で働いていた家政婦や料理人といった貧しい使用人たちに同情の念を抱く。長年ケーテの家で家政婦として働いていた女性は、ケーテの働きかけで、家政婦たちの地位向上や社会保険の導入を目指す活動に参加することになり、後年にはウィーンで最初の区議会議員にも選出されている。

ケーテが通ったリセウムは主として上流階級の娘たちの通う学校だった。ケーテが学校で行なった様々な活動は多くの同級生たちの支持を得たが、裕福な貴族や宮廷顧問官などの上流階級の同級生の間では好ましい反響は見られなかった。またケーテを支持していた同級生たちの母親たちの中には、娘には上流階級に合った「良き教養」を与えたいと願い、そのためにケーテを胡散臭く思う者も少なからず存在したと言う。

ケーテがリセウムに通っていた時期はオーストリアで反ユダヤ主義が広まった時期でもあった。しかしながら反ユダヤ主義は上流階級の間では浸透していなかったようで、秘密国家警察に逮捕・拘留されていた間に記した回想録の中でケーテは「1938年まで反ユダヤ主義の存在を全く知らなかった」と書いている⁴⁾。

1914年10月、ケーテはウィーン大学で学び始める。同時期、市内に貧しい労働者用の託児所が作られたことを知ったケーテは子供たちの世話役を申し出て、3年間世話をし続けている。ケーテは子供たちと遊ぶだけでなく、彼らの勉強を見てやったり、楽器の演奏を教えるもいる。また子供たちの貧しい家庭状況を目の当たりにした彼女は、友人や知人たちから食料や衣類を集めて配布活動も行なっている。そうした体験や、E.ゾラ、H.マン、M.ゴーリキなどの読書を通じて、ケーテには次第に社会主義への強い想いが生まれてくる。

当時ウィーン大学では女子学生は法学部には登録出来なかったもので、彼女は国家学を専攻す

3) H. Steiner, a.a.O., S.20.

4) Ebenda, S.24.

る。ケーテは後に社会主義化委員会で共に活動することになる C. グリュンベルク教授の「農業史と農業政策」, 「社会主義と社会的運動の歴史」の講義を熱心に聴講し, 史的唯物論やマルクスの著作にも関心を抱くようになる⁵⁾。

1917 年 2 月のロシア革命はオーストリアでも大きな反響を呼び, 革命に同調する労働者が増え, 戦争反対のストライキも多発した。

同年 5 月, ウィーンで Fr. アードラーに対する裁判が開始されると, ケーテは大きな関心を抱いてこの裁判を見守っていく。そして絶対主義的国家に抵抗し, 戦争反対の主張を貫き, 社会主義のために尽くす Fr. アードラーの勇敢な態度はケーテのそれ以降の活動に大きな影響を与えることになる。その後すぐに彼女は『社会主義への信仰告白』を書き, 学生集会で最初の政治演説を行なっている⁶⁾。またこの時期にケーテは A. ベーベルの『女性と社会主義』の著作を読み, 女性の権利は既存の社会と闘うことによってしか獲得されえない, と確信する⁷⁾。

間もなくケーテは数名の女子学生と共に学内で女性の権利に関する集会や勉強会を開催し, 著名な活動家を招聘するなど, 活発な活動を開始する。

同年秋, ケーテは女性という理由でウィーン大学での受講科目の修了試験を受けることが許可されなかったため, ドイツのハイデルベルク大学へ入学の手続きを取る。ハイデルベルク大学に入学すると, 彼女はすぐに社会主義を信奉する学生たちの仲間に加わる。仲間の中にはまだ若かった詩人 E. トラーもいた。彼らは戦争反対運動を起し, ロシアの 10 月革命勃発を歓迎した。それに対しドイツ当局は厳しい措置を取り, 同年のクリスマスにケーテは国外追放処分を受け, 「戦争期間中はドイツへの入国を禁止」される。ケーテはウィーンに戻るしかなかった⁸⁾。

ケーテが戻ってきたウィーンでは 1918 年 1 月に大規模なストライキが勃発する。工場や企業内でロシア革命に倣って労働者評議会「レーテ」が選出された。ケーテもこのストライキに参加し, 企業や工場の前でビラの配布活動などを行ない, 彼女は「左翼急進派」とみなされる⁹⁾。

1918 年 7 月, 特別措置でドイツへの入国禁止を解除されたケーテはハイデルベルク大学に戻り, 博士論文の諮問を無事に終え, 哲学博士号を授与される¹⁰⁾。

5) Walter Göring: *Politik und Aktion: Käthe Leichter und die freie Gewerkschaftsbewegung*, Wien, 1972, S.106.

6) H. Steiner, a.a.O., S.46f.

7) Ebenda, S.41.

8) Ebenda, S.47.

9) Ebenda, S.50.

10) Walter Göring, a.a.O., S.108.

1918年と1919年の秋、彼女は再度ウィーン大学に受講登録し、主として法律を学んでいる。この時期もケーテは左翼学生たちの中で積極的に活動し、確信的な社会主義者となっている。その活動の中で彼女はオットーと知り合うことになる。

政治活動

1918年11月の共和国宣言以降、ケーテは「新しい左翼」というグループに所属する。このグループは第一次大戦間の左翼の伝統を受け継ぎ、社会民主主義者や結成されたばかりの共産党および他の左翼グループ間に生じていた亀裂を克服し、労働者運動の統一を図ろうとするグループだった¹¹⁾。

1920年5月末から6月初めにかけて、労働者評議会の全国会議がウィーンで開催され、ケーテは演説を行ない、労働者評議会の最も重要な課題は経済政策にあると、主張している¹²⁾。

1921年、ケーテはオットーと結婚し、ウィーン一区の祖母の住まいを譲り受けて住むことになる。この時期、ケーテは労働組合系の社会主義化委員会の臨時の契約職員として、またオットーは小さな雑誌の編集者として働くが、経済的にはかなり困窮していた。

1922年3月24日、連邦首相J. ショーバーは辞任し、5月31日、国会での激しい議論の後、I. ザイペルが連邦首相に就く。彼は外国の援助を受けて財政改革を実行するが、その改革は数千名の公務員の首切りに始まり、労働者に苛酷な負担をもたらすものだった。

ケーテは社会主義化委員会で臨時の契約職員として働いていたが、「どんな大規模な社会主義化も、銀行の社会主義化まで進めない限り、考えられえない」¹³⁾と主張する彼女は、社会主義化委員会の中でも浮いた存在になっていく。

1924年2月、長男ハインツが生まれる。当時の優れた政治的指導者で知人でもあったO. バウアーはそれを知ると『労働新聞』に『生まれていない者たちの保護、あるいは生まれた者たちの保護?』という論説を発表する。それは国家による「子供保険」の導入を主張したもので、現在の「児童手当」の制度を先取りしたものだ。ケーテは自分の出産を契機にO. バウアーがそうした論説を書いたことを生涯誇らしく思っている¹⁴⁾。

1925年5月、ケーテはついに社会主義化委員会のメンバーから外されてしまう。困った彼女は尊敬する師であるC. グリュンベルクが指導しているフランクフルトの社会学研究所の共同研究員になるべく、Fr. アードラーにその仲介を頼んでいる。また同時期に夫のオットーは

11) H. Steiner, a.a.O., S.51.

12) Ebenda.

13) Ebenda, S.66.

14) Ebenda, S.26f.

フランクフルトの新聞社の編集長のポストに応募している。

ケーテの仕事ぶりを良く知っていた W. エレンボーゲン¹⁵⁾は、彼女をウィーン労働者評議会の女性部局の指導部に推薦した¹⁵⁾。しかしながらウィーン労働者評議会内では書記局と部局担当者間の意見が分かれており、さらに上層部には反ユダヤ主義の委員も存在していた。結局ケーテはウィーン労働者評議会ですら半日だけの事務局秘書として働くことになった。

ケーテはその豊かな教養と労働者への強い連帯感、問題や疑問をはっきり口にする勇氣などにより、間もなくウィーン労働者評議会に於いて人々の注目を集めることになる。また労働者評議会の「女性部局」とも関係を深めていく。

ケーテは組合の女性部局や社会民主党の女性委員会とも密接に連絡を取りあい、間もなく多くの有能な女性同志たちと力を合わせ、女性たちの政治的発言力を強めることに成功する。また若い女性労働者の多くがケーテによって勇氣づけられ、演説を行ない、論文を書くようになる。ある女性幹部は回想している：

「ケーテは法律の推敲、議会用の動議の準備の際の不可欠の協力者でした。彼女は組合の多くの講習会で講師を務め、多くの組合集会で講演を行ないました。」¹⁶⁾

ケーテは労働者評議会女性部局の研究報告の中で、自分の仕事は「組合の業務」の中での活動であると見なしていた：

「自由な労働組合は労働規約の制定、労働者階級の経済的向上を得るための闘いを導かねばならない。労働者評議会は常に労働組合と連携し、社会政策や経済政策の領域に於いてあらゆる経験を集め、統計的、学問的にまとめていかなければならない。また経済的、社会的領域で遭遇する法律的措施や管理措置に対して態度を決めねばならない。そして——再び組合と協力して——独自の提案を練り上げねばならない。」¹⁷⁾

ケーテが労働者評議会に加わるまでは「女性労働者」の問題が議論されることはなかった。ケーテは先ずは、女性労働者に関する様々な資料を集中的に収集することが最初の課題だと見なした。彼女の長年の友人の一人はこう記している：

「およそ当時のケーテの仕事ぶりを目にするのができた人は、驚嘆の念に満たされました。。。ケーテは事実に基づいた明晰な態度で、数字を分析し、企業の指導的な労働者と常にコンタクトを取り、学問的な論文では単にプラトニックな主張を的確に述べるだけでなく、人々の生活に触れ、それを記述し、それでもって社会の良心を目覚めさせようとしていたのでした。」¹⁸⁾

ケーテは家政婦の 3 分の 2 が、法律で定められた一日 13 時間労働を超えて働かざるを得な

15) Walter Göring, a.a.O., S.126.

16) Wilhelmine Moik: *Die Frau*, Nr.8., 1952, S.3.

17) Käthe Leichter: *Das Referat für Frauenarbeit der Wiener Arbeiterkammer*, in: *Handbuch der Frauenarbeit in Österreich*, Wien 1930, S.544.

18) H. Steiner, a.a.O., S.78.

い状況、また彼女らのほぼ半数は与えられるべき有給休暇をもらえずにいること、家内工業労働者の95%が女性であり、彼女らの半数以上は一日11時間以上働いている現状などを明らかにし、経営協議会規定を家内工業にも適用すること、また家内工業労働者を社会保険に加盟させること、妊産婦の保護を家内工業労働者にも適用すること、家内工業委員会の創設および家内工業労働者の賃金を企業労働者の賃金と同じにすることなどを主張した¹⁹⁾。

ケーテは女性労働者に関する資料の収集や公表と同時に、女性労働者保護の法整備に力を注ぐことも自らの使命と見なしていた。多くの集会で女性労働者たちに、社会保険の有する難しく、複雑な問題に対する関心を呼び起こそうとした。またケーテは徐々に増えていた女性の大学卒業者の就職先の開拓にも関心を示した。

1927年、ケーテは労働者評議会と自由組合の共通の中央機関である「労働と経済」に女性部局を設置した。そして女性部局の編集部指導者として論文を発表し、焦眉の問題を巡っての活発な議論を導いた。すなわち、既婚女性の労働条件の問題、同一労働同一賃金の問題、女性の就労の場の拡大などを巡っての議論である。また女性たちに論文の執筆を促した。その促しに応じて、R. ヨッホマンを始め多くの女性たちが論文を執筆した²⁰⁾。

またこの年の7月にパリで開催された「国際女性労働組合会議」にケーテはオーストリアの代表団の一員として参加し、講演を行なっている。その講演の中でケーテは、女性労働者を取り巻く増大する様々な問題を指摘し、できるだけ多くの働く女性労働者を組合に加入させ、彼女たちを「活動的な組合員に育てていく」と締めくくった²¹⁾。

1928年2月の労働者評議会の女性部局報告で、ケーテは実例や数字を挙げて、失業中の女性が数限りない不当行為に晒されている実態を明らかにし、また平行してオーストリアに於ける女性労働に関する論文の執筆にも力を注いでいる。

1930年5月、ケーテの編集責任の下に『オーストリアに於ける女性労働のハンドブック』が作成された。そのハンドブックは六部から成り立っている。第一部では第一次大戦前のオーストリアに於ける女性労働の発展、さらに戦中・戦後の発展、第二部では女性の職業活動、とりわけ勤労女性たちの労働業績、労働事情、および活動範囲が取り上げられている。第三部では女性労働の付随現象として現れた社会的、人口政策的、文化的問題が論及され、第四部では、彼女たちの経験に基づき、勤労女性たちを立法や行政機関を通して保護する試みが述べられている。また第五部では組合やインターナショナルな組織に於ける女性の地位、第六部では公的生活における勤労女性の立場が論じられている。

19) Käthe Leichter: *Erfahrungen des österreichischen Sozialisierungsversuches*, in: *Der lebendige Marxismus*, Jena 1924, S.245.

20) H. Steiner, a.a.O., S.87.

21) Ebenda, S.129.

ケーテはこのハンドブックの不十分さを十分認識しつつ、以下のように評価して述べている：

「勤労女性たち、学問的な活動を行なっている女性たち、すなわち勤労することで直接に経験を得ている女性たち、管理部門職ないしは学問的活動で知識を得ている女性たち、そうした彼女たちの共同作業がまさしくハンドブックに特色を与え、同時にしばしば気づかれていなかったオーストリアの女性労働者運動に於ける精神力の豊かさを示してくれる。」²²⁾

ケーテの評価を裏付けるように、このハンドブックは女性労働者、女性組合員や組合幹部たちからも高く評価される。ドイツの著名な女性社会主義者 A. ジーメンスはこう述べている：「この本は勤労女性や組合に組織された女性たちだけでなく、全ての人々に、社会のを知ることが重要な全ての人々にとって、とりわけ女性の社会主義者にとって大きな意味を有している。この本は、長い間、多くの人々によって辛く感じられていた間隙を埋めてくれる刊行物である、と私は思う。」²³⁾

1931年1月、ケーテは女性幹部講習会で二晩に亘って「時代の変化の中での女性労働」、また更に数ヵ月後には「文学討議・女性問題」のタイトルで三晩に亘って講演を行なっている。またこうした働く女性たちの問題を男性労働者にも伝え、彼らの支持と援助を獲得することが重要だと見なしたケーテは、労働者評議会のラジオ放送で、月に1回「働く女性のためのラジオアワー」を担当し、彼らの関心を呼び起こそうとした。

更にケーテは国内外の社会・政治的出来ごとに関するニュースも取り扱った『女性労働に関する報告』を毎月出版し、組合の女性幹部たちに送付している。

1931年7月、ウィーンで社会主義インターナショナルの国際女性会議が開催されたが、ケーテはオーストリアの代表団の一員として参加している。その会議の直前、彼女は論文を書き、勤労女性の多様な問題はインターナショナルなものであり、「組合的、社会主義的、インターナショナル的」にしか解決されえない、と結論付けている²⁴⁾。

1932年4月、女性たちの信頼を得ていたケーテは経営協議委員の選挙に立候補するよう求められる。それまで経営協議委員は男性しかいなかったからである。1932年の選挙でも当初は男性候補者しかいなかったが、女性労働者たちの絶対的な支持により、ケーテは唯一の女性経営協議委員に選出される。ケーテを支持したある女性はこう述べている：

「彼女は女性の同僚たちのこうした完全な連帯感に満ちた態度を非常に喜んだ。それは彼女の政治的教育の成果でもあった。」²⁵⁾

22) Handbuch der Frauenarbeit in Österreich, Wien 1930, S.4.

23) Anna Siemens: *Kampf*, Wien 1931, S.89.

24) Käthe Leichter: *Frauenarbeit als Problem des internationalen Sozialismus*, in: *Arbeit und Wirtschaft*, 1931, S.552.

25) H. Steiner, a.a.O., S.74.

1932年の地方選挙後、ケーテは『労働者新聞』に「ウィーンの女性たちはどのようにして候補者を選んだのか」というタイトルで、この選挙の分析、特に女性の選挙への参加に関する論文を発表する。ウィーンでは選挙権のある割合は男性よりも女性の方が多かったが、実際に選挙に参加した割合はほぼ同じだった。また女性有権者の5分の3以上が社会民主党へ投票していた。こうした選挙結果からケーテは以下のような新たな課題を見出している：「今回選挙に行かなかった8万6千名の女性たちに近づくこと。。。キリスト社会党を信奉している数千名の女性たちに近づくこと。彼女たちは信念が揺らいでおり、彼女たちが右へ、ナチスへなびいて行くのを阻止しなければならない。」²⁶⁾

ケーテは企業での活動の強化、地域の政治組織との密な連携の必要性を説き、さらにナチスのプロパガンダの危険性を認めている。

1932年11月、民主主義の制度、労働運動や共和国憲法に対するナチスの攻撃がますます激しくなる中で、社会民主党の党大会が開かれる。この党大会で、当時の党指導者たちは「プロレタリアートの運動の自由及び労働者民主主義のために自由の島を維持する」と宣言したが、それは指導部を含めた多くの党員が抱いた幻想に過ぎなかった。

1933年10月、ウィーンで社会民主党の臨時党大会が開催され、党の機構の民主化、党指導部と大衆との間の密接な関係構築の手段として〈党協議会〉を設立することなどが決定された。しかしながらケーテは翌月に論文を発表し、党指導部の「楽観主義的、悲観主義的宿命論」に反対の立場を取り続けた²⁷⁾。

逮 捕 ま で

1934年2月12日、リンツで始まった社会民主党の共和国防衛隊と警察・護国団との武力衝突はウィーンにも拡大する。いわゆる「1934年2月蜂起」である。当時ウィーン市政は社会民主党下にあったが、警察・護国団はウィーン市庁舎を占拠し、市長K.ザイツを逮捕する。O.バウアーはチェコへ逃れることができたが、他の多くの労働運動指導者や組合幹部たちは逮捕される。ケーテ夫妻は幸いにも知人宅に身を潜めることができた。夫妻は知人宅から信頼していた家政婦に、自宅のリビングに置いてあった様々な政治的文書や私信を焼却するよう依頼している²⁸⁾。またこの家政婦は2月末にはケーテ夫妻の二人の息子を連れてスイスへ逃れている。

ケーテ夫妻は『労働者新聞』の数名の編集者たち、さらにまだ逮捕されていなかった労働

26) Käthe Leichter: *Wie haben die Wiener Frauen gewählt?*, in: *Arbeiter-Zeitung*, 9.5.1932.

27) H. Steiner, a.a.O., S.148.

28) Ebenda, S.152.

者運動の幹部たちと連絡を取ろうとした。出来るだけ速やかに反ファシズムの非合法組織を立ち上げるためである。ケーテは非合法の社会主義青少年組織を立ち上げていた青少年幹部二人と連絡を取り、旧知の知人宅で彼らを含むグループの会合を持った。最初の会合は1934年2月26日に行なわれ、M. アッカーマンをはじめとする最初の非合法指導部が形成された。また新たに形成された非合法組織の名称は「革命的社会主義者」と名づけられた²⁹⁾。

1934年3月2日、ケーテ夫妻は偽名を使ったパスポートでチェコのブリュンに出かけ、そこへ逃れていたO. バウアーにオーストリアの最新の政治状況と非合法グループの最初の組織化の試みについて報告している。二人はさらに数日後にスイスのチューリッヒへ赴き、Fr. アードラーにも同様のことを報告している。またその際に夫妻は一月振りにはスイスへ逃れていた二人の息子たちとも再会している。

1934年9月、チェコのブリュン近郊で「革命的社会主義者」の初めての代議員会議が開催される。この会議は、「革命的社会主義者ウィーン会議」と呼ばれ、これまでの活動の総括を行ない、非合法組織の経験を有効に活用するとの議論がなされた³⁰⁾。

「革命的社会主義者ウィーン会議」は新たな中央委員会メンバーを選出し、また中央委員会の下には教養委員会が設置され、ケーテは唯一の女性委員としてその委員に選出される。夫のライヒターは「革命的社会主義者」と他の非合法の組合との間の連絡を維持しながら、非合法の『組合情報』を出版、さらに幾つかの非合法のビラやパンフレットの出版活動を行なっていく³¹⁾。

ケーテ夫妻はこの9月には半年振りにオーストリアへ戻り、ウィーン郊外の夫妻の家は間もなく非合法組織幹部たちの格好の落ち合う場所となる。R. ヨッホマンはその家で「素晴らしい時」を過ごし、また将来について何時間も議論したという³²⁾。またケーテの知人の女性は自分の40歳の誕生日を楽しく祝ってもらったことを覚えている。この時期、ケーテは過酷な政治状況やナチスなどによる迫害にも関わらず楽観的だったとのことである。結果的に、そうした彼女の楽観主義が悲運を招くことになる。

1935年1月、「革命的社会主義者」の数名の幹部たちが逮捕される。そのためウィーンを逃れ、チェコのブリュンで「革命的社会主義者」の中央委員会が新たに形成されることになる。

1935年夏、「革命的社会主義者」と共産党による反ファシズムの共同戦線の可能性が議論され、O. バウアーは「この歴史的機会をみすみす見逃してはならない」と両者の共同戦線を強く支持する見解を示す³³⁾。またケーテも社会主義運動と共産主義運動の基本的な意見の相違

29) Ebenda, S.155.

30) Ebenda, S.156.

31) Ebenda, S.156f.

32) Ebenda, S.157.

33) Josef Buttinger: *Am Beispiel Österreichs*, Köln, 1953, S.300.

は反ファシズムの障害になることはないと確信し、この反ファシズムでの共同戦線を全面的に支持した。その結果、「革命的社会主義者」と共産党中央委員会の間で直接交渉が行なわれ、共同の署名がなされ、声明も出された³⁴⁾。こうしてオーストリアに於ける非合法の反ファシズム、反ナチスの活動が活発となる。

この年、ケーテは『プロレタリアートの女性たちに如何なる危険性が迫っているのか』というタイトルの論文を発表し、女性に敵対する特例法を作成しようとしていた、当時のシュシュニク政府の計画を暴いている。それは妊娠中絶を最低禁固3年に処するという、「これまで世界の如何なる文化国家において可決されたことのないような」特例法だった。ソヴィエトも妊娠中絶に反対する措置を取っていると主張する特例法支持者に対してケーテはこう反論した：「ソヴィエトはそうすることが可能である。何故ならソヴィエトは模範的な施設、サナトリウム、子供療養所、遊園地などの設置により、母親たちが子供の面倒を見る手助けをしているからである。」³⁵⁾

1936年の母の日にケーテは、妊産婦や母親たちの保護を主眼とした女性擁護の立場から戦争反対と反ファシズムのビラを作成している：

「1936年の母の日は新たな世界大戦の兆候の中にある。。。イタリア・アビシニア戦争は近代戦争の、これまでに例を見ない残虐性を母親たちに突きつけている。。。戦争やファシズムに反対の女性や母親たち、社会主義の世界を立ち上げるのに共に助け合いたいと思っているあなたたち、非合法の組織、自由組合連合、革命的社会主義者の隊列を強化しようではないか！」³⁶⁾

同年8月、社会主義労働者インターナショナルの女性委員会が「経済的、政治的民主主義と女性」のテーマでベルギーのブリュッセルで研究会を開催した。ケーテは既にウィーンの警察の監視下にあったが、偽名を使ってブリュッセルへ出かけ、「ファシズムに於ける組合」というテーマで講演を行なっている。

1937年3月、ケーテは「革命的社会主義者」の情報誌『情報・ニュース業務』の出版を引き受ける。情報誌は週一回規則的に出版されていたが、同年11月に情報誌の編集を行なっていた数名の仲間が逮捕され、タイプライターも押収される。しかし情報誌は中断されることなく出版され続けた。

1938年3月のナチスによるオーストリア侵攻までの数週間の間ケーテは非合法労働者運動の多くの議論に参加した。彼女はナチズムに対する毅然とした拒否の態度を貫き、反ナチズムの統一的な行動を全面的に支持した。

1938年3月11日の夜、ドイツ国防軍、秘密国家警察はオーストリア国境を超え、領土を

34) H. Steiner, S.160.

35) Ebenda, S.163.

36) Ebenda, S.168.

制圧せよとの命令を受ける。その後の数日間で 7 万人以上のオーストリア人が逮捕され、逃亡に成功した者はごく僅かだったという。ケーテの夫オットーはユーゴスラビアへの逃亡には失敗したが、3 月中に偽造パスポートを使ってスイスへ逃れることに成功した。一方のケーテはユダヤ人でもあり、特に危険に晒される恐れがあったが、年老いた母親を残して自分一人だけ逃亡する気にはなれず、即刻国外へ逃れるようにとの友人たちの忠告も退けた。そうしたケーテを秘密国家警察は常時監視し、ケーテ夫妻とも親しかった、かつての「革命的社会主義者」幹部の一人から彼女の情報を常に得ていたのだった。

ある知人の女性はケーテとの最後の出会いを以下のように述べている：

「私は 1938 年 4 月に彼女の住まいを再度訪ねました。当時既に秘密国家警察のスパイとして働いていた H. パーフが彼女の傍らにいました。。。彼は、大事な物などはどうするつもりなのか、と巧みに質問しました。すると彼女は一本の樹木を指さし、<この木の下に埋めているのよ>と答えました。。。2, 3 日後、彼女は逮捕されました。そして秘密国家警察の連中が最初に行なったことは、その木を掘り返すことでした。」³⁷⁾

また秘密国家警察に逮捕される危険が迫った社会主義者や、逮捕された社会主義者の残された家族の支援を行っていた F. ネードゥルは、ケーテのために列車の切符と偽造したチェコのパスポートを調達したが、その際にケーテは彼女に「いつまた戻ってこれるのかしら？」と哀しげに尋ねたという³⁸⁾。

ケーテの長男ハインツは彼女が逮捕される数ヶ月前の、最後の別れの様子を伝えている：

「母は私に言いました：<あなたは今から勇気を持たねばなりません。私は逮捕されます>。。。別れがやってきました。母はとても哀しそうでしたが、非常に落ち着いていて、三カ月間拘留されそうだと、言いました。」³⁹⁾

またケーテ逮捕の状況は彼女の母親が語っている：

「今朝二人の秘密国家警察が私の所へやってきて、ケーテのことを尋ねました。私が二人に、彼女はここにはいないし、どこにいるのかも知らないと言うと、二人は彼女が帰るまで待っていると言いました。その後ケーテから電話があったのですが、秘密国家警察は彼女にこう言ったのです。<我々はあなたがどこにいるか分かっている。すぐにこちらへ来なさい。さもないとあなたは母親に二度と会えなくなりますよ。>しばらくしてケーテがやって来て、二人の秘密国家警察は彼女を連れて去って行きました。」⁴⁰⁾

母親はケーテが逮捕された後、娘のことを案じ、何度も監獄のケーテに手紙を書いている

37) Ebenda, S.177.

38) Ebenda.

39) Ebenda, S.178.

40) Ebenda, S.178f.

が、手紙がケーテに手渡されることはなかった。

1938年5月30日、ケーテは秘密国家警察の初めての尋問を受ける。彼女は「逃亡する」意図はなかったと主張したが、秘密国家警察は受け入れなかった。6月2日の二度目の尋問で、ケーテは長男ハインツを知り合いの所に二日間連れていったが、数日の内に出国許可証が発行されると思っており、逃亡する意図はなかったと再度主張した。

7月3日の尋問ではケーテは友人のF. ネードゥルのことを問われた。当初は彼女とは面識はないと主張していたが、7月13日、ケーテはついに彼女と手紙のやり取りを認めざるを得なかった。しかし彼女を不利な立場に追い込んでほしくないと考えたケーテは、8月11日の尋問で、F. ネードゥルは無口な女性で、彼女が政治活動を行っていたことなど全く知らない、と証言した⁴¹⁾。

1938年9月12日、捜査判事は以下のような拘留命令に署名した：
「1895年8月20日ウィーン生まれのマリアンネ・ケーテ・ライヒター博士は。。。大逆準備罪容疑で。。。拘留するものである。」⁴²⁾

9月13日に尋問が継続されたが、ケーテは「大逆罪準備」を認めなかった。またケーテは民族裁判所で審理されている他の革命的社会主義者たちのことを尋ねられたが、彼らを釈放させるため、彼らは非合法組織とは全く関係ないと、証言している。

1939年4月7日、ケーテは帝国弁護士会の予審判事の元へ、自分を民族裁判から外し、通常の裁判へ移してもらいたい旨の請願書を送った。その理由としてケーテは、「反ナチズムの行動」など全く犯してはいない、と書き添えている：

「私は拘留されてもう11カ月にもなり、子供たちにも会えないことで酷く悩んでいます。この主任医師は既に1月に私が神経虚脱状態であることを確認しています。」⁴³⁾

5月6日、民族裁判所の帝国検事正はこの件に関する書簡をウィーン州裁判所の検事正へ送付した。5月26日、ケーテは予審判事の元へ連行され、判事から彼女に今や正式に「予審開始」の旨、伝えられた。8月3日、彼女はウィーン州裁判所の検事正に「審理の迅速化」を求める手書きの請願書を送付している：

「私は。。。15カ月も拘禁されています。。。私は講師としてニューヨークのコロンビア大学に招聘されています。9月に講師としての仕事に就かなければ、招聘は破棄される恐れがあります。」⁴⁴⁾

8月7日、ケーテの弁護人は裁判所に釈放申請を提出したが、8月31日にケーテに対する

41) Ebenda, S.184.

42) Ebenda.

43) Ebenda, S.185.

44) Ebenda, S.186.

起訴状が送付される。一刻の猶予もなくなったケーテは 9 月 18 日、必要な出国書類の引き取りのための 9 月 21 日のアメリカ領事館の呼び出しに基づき、「9 月 21 日の領事館出頭を実現させたい」という要請を予審判事に要請したが、要請は聞き届けられなかった。

10 月 14 日、ケーテに対する裁判が開始され、禁固 4 カ月の判決を言い渡される。ケーテは 4 カ月の服役後は釈放されると思っていたようで、強制収容所へ移送されると聞かされた時、非常に落胆し、絶望した様子だったとのことである。⁴⁵⁾

ラーフェンスブリュック強制収容所へ

1940 年 1 月、ケーテはラーフェンスブリュック強制収容所へ送られた。この収容所に関して、ある囚人たちのグループが報告している：

「ベルリンの北、約 80 キロ離れた北ドイツのメクレンブルク州フルステンベルク近郊に大きなラーフェンスブリュック強制収容所があった。収容所は湖の低地の中に隠れ、うまくカムフラージュされていたので、そこを通りがかった人は、それが強制収容所だとは殆ど気がつかなかったようだ。。収容所の周囲には高い壁があり、壁には高圧電線が張られており、それに触れば即死してしまうのだった。。」

ラーフェンスブリュック強制収容所から他の収容所へ再三に渡って囚人たちが送られて行ったにも関わらず、収容所の収容人数は急速に膨れ上がった。1943 年の 9,000 名から 1944 年 10 月には 36,000 名へ、1945 年 2 月には 50,000 人以上に膨れ上がった。収容所は新しい囚人たちをもはや収容出来ない位に満杯になっていた。⁴⁶⁾

R. ヨッホマンはケーテとラーフェンスブリュック強制収容所で再会したことを記している：「私は収容所でケーテと再会しました。彼女は私が政治犯ブロックの最年長者であることを知っており、最初の日にすぐに私に三つの素晴らしいアドバイスをくれました。＜あなたはここでは経営協議委員ではないことを忘れてはなりません。常にどんな指示にも従うかのように振る舞わねばなりません。正しいのは常に親衛隊なので。でもサボタージュを行ない、親衛隊を欺き、囚人を護るために、あなたは何でもしなければなりません。また我々の拷問者よりもあなたの方が馬鹿であるかのように常に振る舞わねばなりません。というのも連中はほぼ全員が幼稚な以上に幼稚なので。＞。。。。」

彼女の関心はいわゆる＜人間のくず＞と呼ばれている女性たち、娼婦、泥棒、殺人者などに注がれました。。彼女は、そうした人たちは、様々な状況のために身をもち崩さざるを得なかったのだと明言しました。＜そうした人たちに責任があるのではなく、社会に責任があるの

45) Ebenda, S.191.

46) Ebenda, S.199.

です>、と彼女は再三主張していましたが、事実、彼女の言う通りだったのです。⁴⁷⁾

1941年の冬に収容所へ送られてきたある囚人は、ケーテが何事も楽天的な結論を導いていたことに驚きの念を抱いたという。そして最後に彼女のことをこう述べている：

「自由時間での議論でも彼女は——他の囚人とは異なり——まさに信仰心に満たされたように、オーストリアと社会主義の未来を信じていました。過酷な最後の時まで。」⁴⁸⁾

ラーフェンスブリュック強制収容所から死に向かう移送の前、ケーテは R. ヨッホマンに突然こう言ったという：

「ローザ、お願い、もし私に何かあったら、どうか私の3人の息子たちに（彼女は夫のオットーも自分の子供だと言っていた）宜しくと伝えて欲しいの、私は彼らに大いに感謝しなくてはならないの、彼らは私の人生の中で最も素晴らしいものだったのだから。でも党が蘇れば、私はもう一度人生を生きることができるわ、そうすれば私はこれまでと全く同じように生きていくわ、党の中で、党のために。」⁴⁹⁾

家族に宛てたケーテ最後の手紙は死の直前に書かれている：

「愛するレンツィ、1月25日付きのお金と手紙、心からお礼を言います。フランツィスの手紙は嬉しいサプライズでした。。。私のことは心配いりません！私は健康ですし、私の想いは常に非常に深く、変わる事のない愛に満ちて、愛する3人の息子たちの元にあるのですから。。。」⁵⁰⁾

1942年3月17日、ケーテは殺害される。46歳だった。

4月24日、ウィーンでケーテの僅かな友人たちが集まり、良き妻にして優しい母親、そして何よりも勇敢だった社会主義者に最後の別れを告げた。

ケーテの死の知らせはすぐに国外にももたらされた⁵¹⁾。1942年のメーデーの日、ニューヨークに拠点を移していた「オーストリア労働者評議会」でケーテの追悼が行なわれ、彼女と長年共に闘ってきた W. エレンボーゲン「彼女は英雄だった。。。彼女は、社会主義は人間の中に最も高貴なものを呼び起こすという事実の証人として、我々の前に立っている」と追憶の言葉を述べた⁵²⁾。

47) Ebenda, S.201f.

48) Ebenda, S.204f.

49) Ebenda, S.36.

50) Ebenda, S.208

51) Ebenda, S.209.

52) Ebenda, S.210.

お わ り に

筆者はこれまでにナチスによって殺害された女性たち、例えばアウシュヴィッツの囚人医師のエラ・リングェンス、ナチスの「強制断種」や「安楽死」に抵抗した修道女アンナ・ベルタ・ケーニッヒスエック、「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれた修道女アンゲラ・マリア、断頭台へ送られた修道女マリア・レスティトゥータなどについて論文を書いてきた。そうした論文執筆の際にはいつも何とも言えない憂鬱な気分になってしまい、論文完成後もしばらくは気分が滅入ったままだった。今回もナチスの暴力にもめげず、ウィーンの労働者のために、特に女性労働者のために闘い、そのためにナチスにより殺害されたケーテ・ライヒターの生涯を辿りながら、これまで同様、何とも言えない憂鬱な気分になっている。もしケーテが殺害されることなく、無事に第二次大戦を生き延びていたとしたら、彼女は間違いなく充実した素晴らしい人生を送り、働く女性たちのために大いに活躍していたことであろうと思われる。ただ多少ながらも心が晴れる出来事がある。本稿執筆の上で負うところの多かった H. シュタイナーによる最初のケーテの自伝出版を契機として、1991年に「ケーテ・ライヒター賞」(女性労働者および労働運動の女性史のためのオーストリア国家賞)が創設され、女性労働者のために尽くした女性活動家たちが表彰されていることである。この賞はオーストリアの政権交代のため2000年に一旦は廃止されたが、2005年に復活し、現在も続いている。また1995年にはケーテの生誕100年を記念した切手も発売されている。